

新入生のボランティア意識—「新入生ボランティア活動アンケート」から

1. 調査の目的と概要

ボランティアセンターでは、毎年4月新入生オリエンテーションの際に、ボランティア活動に関するアンケート調査を行っている。この調査は、新入生のボランティアへの意識や活動の意向を明らかにし、センターが取り組むべき課題についての情報を得ることを目的としている。2001年度に開始した新入生を対象としたこの調査は、本年度で10回目を迎えた。年度ごとに、調査項目に多少の見直しはあるものの、基本的には同じ質問項目を用いてきた。調査結果は各年度の報告書で公開されている。

2010年度は2405名の新入生から回答を得ることができた。調査概要は以下の通りである。

調査対象者	明治学院大学 2010 年度 1 年生
調査期間	2010 年 4 月
調査方法	各学部の新入生オリエンテーションにて調査票を配布し、その場で回収した。
調査結果	総数 2405 名 (男子 : 990 名 (41.2%)、女子 : 1408 名 (58.5%)、不明 7 名)

文学部 (英文学科 192 名、フランス文学科 114 名、芸術学科 130 名)

経済学部 (経済学科 238 名、経営学科 147 名、国際経営学科 123 名)

社会学部 (社会学科 162 名、社会福祉学科 206 名)

法学部 (法律学科 265 名、政治学科 130 名、消費情報環境法学科 174 名)

国際学部 (国際学科 287 名)

心理学部 (心理学科 126 名、教育発達学科 77 名)

調査項目	<ul style="list-style-type: none">・大学入学以前のボランティア活動経験について・大学時代にボランティア活動に参加したか・参加したい理由、活動日の希望、活動頻度の希望、活動内容・参加したくない理由・関心のある活動領域・ボランティア活動を始めるにあたっての心配事について・ボランティアセンターの認知度など
------	---

2. 調査結果

(1) 大学入学以前のボランティア活動経験について

「これまでにボランティア活動に参加したことがありますか」という質問に対して、「はい」が47.2%、「いいえ」が52.3%であった（図1）。今年度の新入生の約半数が、大学入学以前に何らかのボランティア活動に参加した経験があることがわかった。ボランティア経験のある学生の割合は、2008年度は50.3%、2009年度は50.3%であったことから、近年、新入生の半数程度は、高校までの学生生活においてボランティア活動を経験してきていることがわかる。

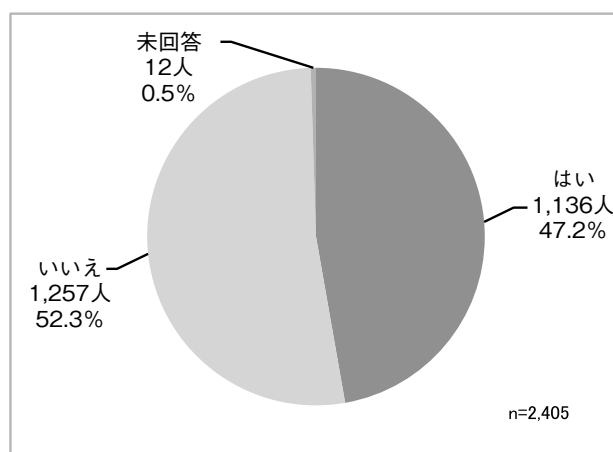


図1 「これまでにボランティア活動に参加したことがありますか」

(2) 大学時代にボランティア活動に参加したいか

「大学時代にボランティア活動に参加したいと思いますか」という質問に対して、「はい」が60.4%、「いいえ」が39.0%であった（図2）。「はい」と回答した学生が、2008年度61.2%、2009年度62.6%であったことから、入学後のボランティア活動への参加希望は約6割程度であることがわかる。

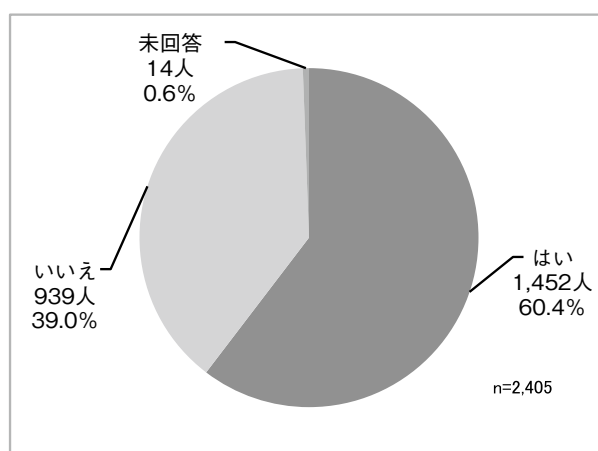


図2 「大学時代にボランティア活動に参加したいと思いますか」

次に、学科別に「大学時代にボランティア活動に参加したい」と回答した学生の割合を求めた（表1）。

表1 大学時代にボランティア活動に参加したいか・学科別（カッコ内は09年度）%

社会福祉学科	83.5 (82.2)	国際経営学科	56.9 (63.4)
国際学科	82.9 (84.0)	芸術学科	55.4 (60.8)
教育発達学科	77.9	政治学科	50.8 (67.2)
心理学科	65.9 (72.5)	消費情報環境法学科	48.3 (55.6)
社会学科	64.8 (57.7)	経済学科	46.2 (50.0)
英文学科	64.1 (71.4)	経営学科	45.6 (33.5)
フランス文学科	63.2 (61.0)	法律学科	43.8 (44.8)

参加したいと回答した学生の割合が本年度最も高かったのは、社会福祉学科の83.5%であり、昨年度トップであった国際学科82.9%とならび、ボランティア活動に高い参加意欲を示している。本年度より新設された教育発達学科の学生も77.9%と高い割合を示しており、心理学科、社会学科、英文学科、フランス文学科がいずれも60%以上の値を示していた。全体的にみると、今年度の新入生の半数以上が「大学時代にボランティア活動に参加を希望する」と回答した学科が14学科中10学科であり、13学科中11学科を占めていた昨年度に比べて、ボランティア活動に意欲的な学生が、やや減少する傾向にあることが示唆される。

また性別にみると、ボランティア活動参加意欲については、女子学生の70.9%が参加を希望しているのに対して、男子学生は45.4%にとどまっており、ボランティア活動の志向性は女子学生の方が高いことがうかがえる。

「大学時代にボランティア活動に参加したい」と回答した学生（1452名）に対して、「ボランティア活動に参加したい理由（複数回答）」を尋ねた（図3）。その結果、理由として挙げられているのは、「新しい出会いや経験を得たい」（59.5%）、「ものの見方や考え方を広めたい」（52.9%）という回答が多かった。次いで、「知識を広げたい」（41.3%）、「授業では得られないものを学びたい」（35.1%）、「地域や人のために役立ちたい」（34.8%）という回答になっている。昨年の結果と比較すると、順位、割合ともほぼ同様な結果であった。なお、これを性別にみると「新しい出会いや経験を得たい」「授業では得られないものを学びたい」「地域や人のために役立ちたい」「ものの見方や考え方を広めたい」という理由をあげた女子学生の割合が、男子学生に比べて高く、この傾向も昨年と同様であった（表2）。この「ボランティア活動に参加したい理由」については、後ほど新たに節を起こして詳細に検討する。

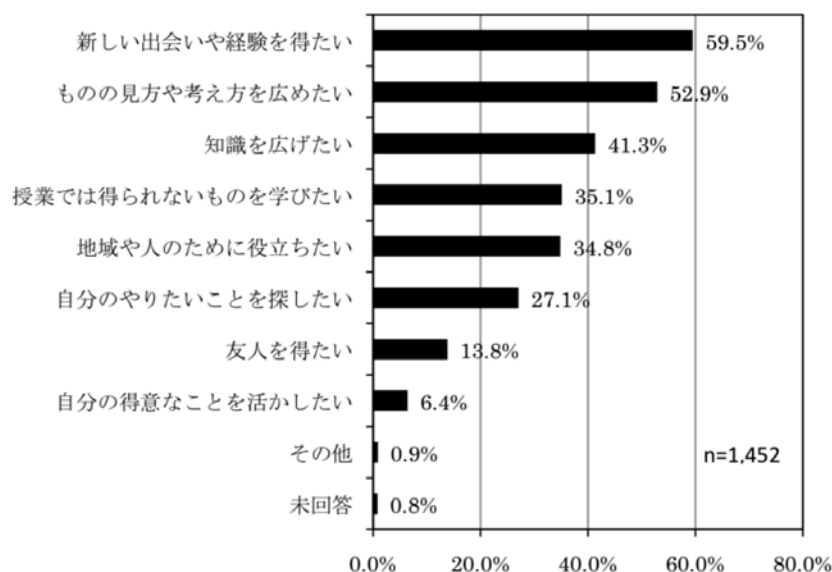


図3 ボランティア活動に参加したい理由（複数回答）

表2 ボランティア活動に参加したい理由・性別（複数回答）

	回答者数	自分の やりた いこと を探し たい	新しい 出会い や経験 を得た い	知識を 広げた い	授業で は得ら れない ものを 学びた い	地域や 人のた めに役 立ちた い	もの の見方 や考え 方を広 めたい	自分の 得意な ことを 活か した い	友人を 得たい	その他	未回答
全体	1452	393	864	600	510	506	768	93	201	13	12
	100.0	27.1	59.5	41.3	35.1	34.8	52.9	6.4	13.8	0.9	0.8
男	449	128	240	187	137	144	208	34	79	7	4
	100.0	28.5	53.5	41.6	30.5	32.1	46.3	7.6	17.6	1.6	0.9
女	998	264	623	411	371	362	556	59	121	6	8
	100.0	26.5	62.4	41.2	37.2	36.3	55.7	5.9	12.1	0.6	0.8
未回答	5	1	1	2	2	0	4	0	1	0	0
	100.0	20.0	20.0	40.0	40.0	0.0	80.0	0.0	20.0	0.0	0.0

次に、参加したいと回答した学生に対し、希望するボランティア活動のスタイルを尋ねた（図4）。活動日に関しては、最も多いのが「夏休み、冬休み等の長期休暇中に」で62.1%であった。次いで「休日」（23.6%）、そして最後に「平日」（14.3%）であった。これも昨年度と同様の結果であり、時間的に余裕のある長期休暇中に活動に参加したいとする学生が大半であり、「平日」に大学の講義やアルバイト、部活動やサークル活動などと並行して、ボランティア活動を希望する学生は1割程度であった。センターに寄せられるボランティア情報では、休日等に行われるイベント的なプログラムと同様に、日常生活における継続的なボランティア活動への要請も多いことから、学生のニーズとのマッチングが課題であることも、例年と同様である。

頻度に関しては（図5）、「月に1～2回」（32.4%）、「2ヶ月に1回くらい」（32.8%）、「一定期間に集中して」（27.8%）の順であった。「週に1回くらい」という頻度の高い活動を希望する学生の割合は、7.0%

と昨年同様に低い値となっていた。活動形態については（図6）、「いろいろな活動に挑戦していきたい」（82.7%）が高く、「ひとつの活動を続けていきたい」（16.0%）に大きく差をつけている。この傾向も昨年とほぼ同様であり、ここ数年変化はみられない。

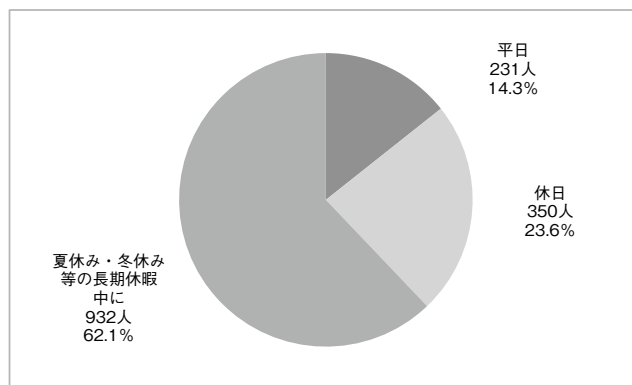


図4 希望する活動日

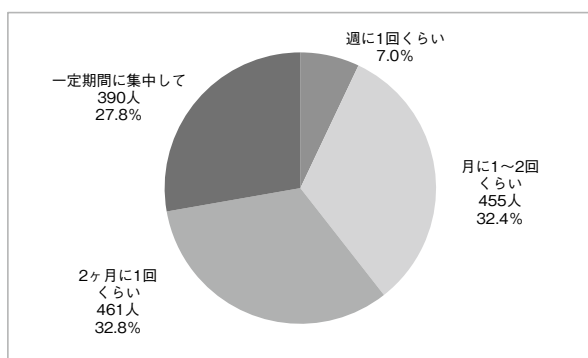


図5 希望する頻度

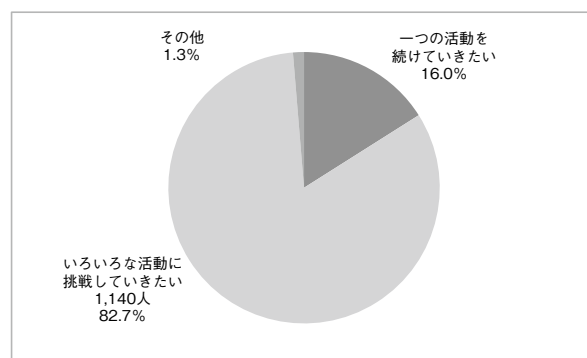


図6 希望する活動形態

一方、大学時代にボランティア活動に参加したいとは思わないとした学生（939名）に対し、複数回答によってその理由を尋ねた（図7）。その結果、「時間がない」（41.7%）、「関心がない」（32.4%）、「きっかけがない」（30.5%）、「やりたいものがない」（16.1%）、「知識や技術がない」（13.1%）、「情報がない」（11.2%）、「お金がない」（9.4%）であった。例年通り、講義やアルバイト、部活動やサークル活動などの時間的な制約があって、ボランティア活動に充てる時間がないと感じている学生が多いことが示唆される。前述した通り、新入生の半数以上が入学前にボランティア活動を体験していることを考え合わせると、「これまでの体験からいやになった」（28%）という回答の割合は例年と同様であり、なおかつ低い割合であったことから、入学前のボランティア活動における「嫌な体験」が主たる阻害要因になっているわけではないことが示唆される。これらの点については後ほど、さらに詳しく検討したい。

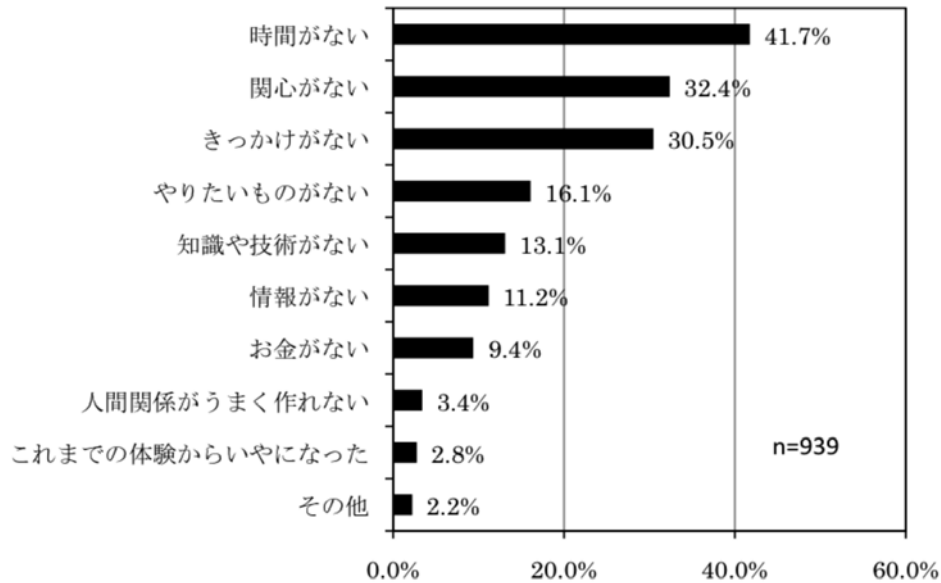


図7 ボランティア活動に参加したいとは思わない理由

(3) 関心があるボランティア活動について

「関心があるボランティア活動分野」を複数回答にて尋ねた(図8)。その結果、「国際」(17.8%)が最も多く、「環境」(13.7%)、「子ども」(13.6%)、「文化」(13.4%)、「まちづくり」(12.7%)、「社会福祉」(8.8%)、「スポーツ」(7.8%)、「心理」(7.1%)、「ボランティア活動支援」(5.0%)の順であった。この順位、割合については、2009年度とほぼ同様の結果であった。

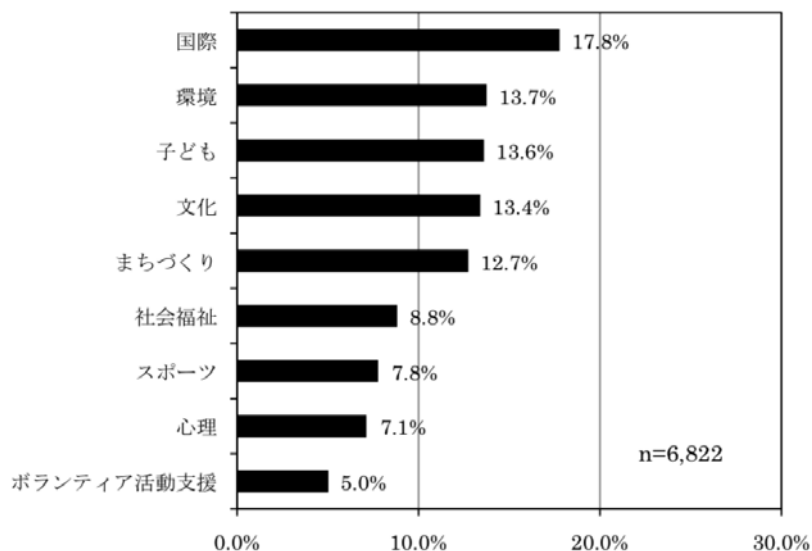


図8 どのようなボランティア活動に関心があるか

それぞれの領域のさらに関心のある活動について、分野ごとの希望者にさらに尋ねた。希望の高かった「国際」「環境」「子ども」領域の具体的な活動内容を、図9～11に示した。

「国際」領域では、「異文化交流」「国際協力」活動を、いずれも半数以上が希望しており、関心の高さがうかがえた。また、「環境」領域では、「ゴミ・リサイクル」(37.8%)、「森林保護」(37.4%)、「動物保護」(35.7%)がいずれも3割を超えていた。「こども」領域では、「保育園・赤ちゃん」が約6割、次いで「放課後活動」が5割と希望が多い。これら人気のある3領域の具体的な活動分野希望は、2007年度からほとんど変化がみられず、固定した希望分野となっている。

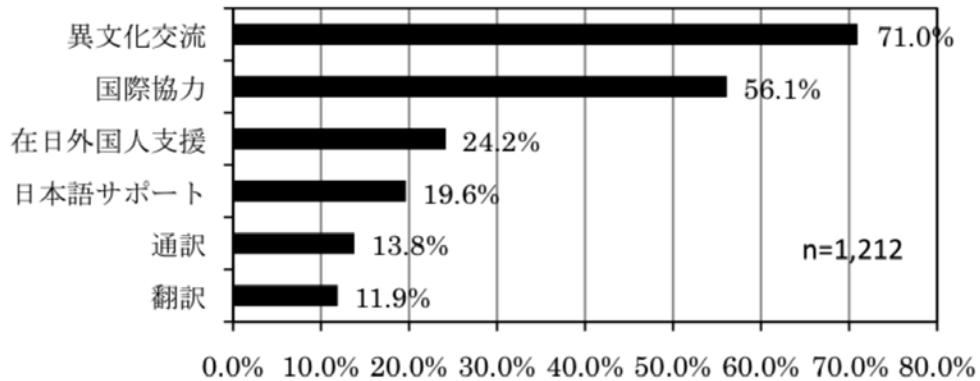


図9 国際の希望分野 (希望者に複数回答)

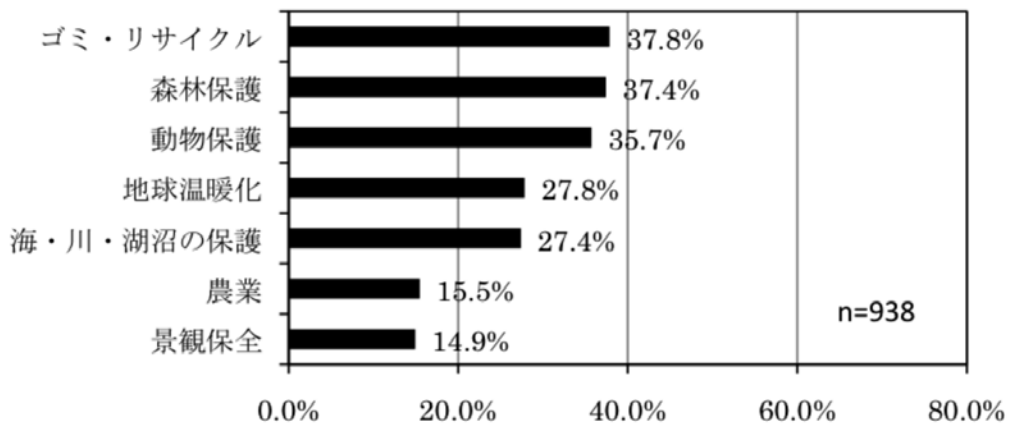


図10 環境の希望分野 (希望者に複数回答)

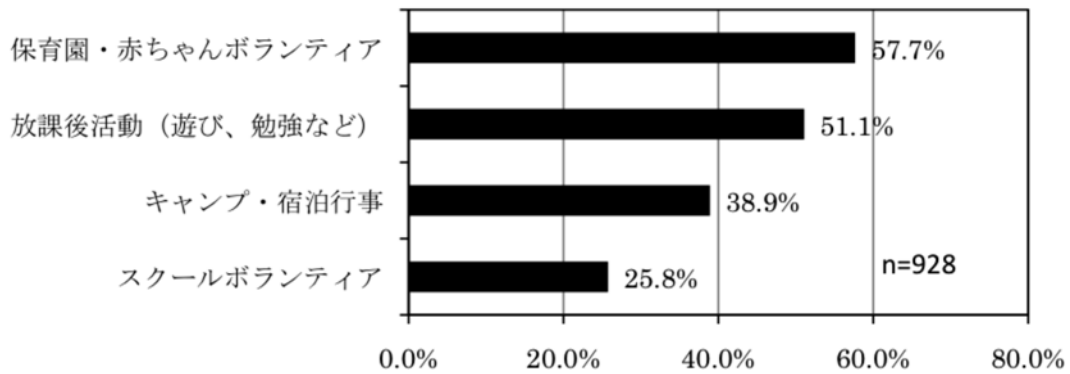


図11 子どもの希望分野（希望者に複数回答）

その他の領域についてみると、「文化」領域では、「音楽」（63.3%）、「映画」（40.7%）が高く、「美術館・博物館」（30.2%）、「歴史」（21.9%）、「食」（21.3%）、「演劇」（19.3%）、「科学」（6.1%）の順であった。本学には理科系の学科が存在しないことが、このような結果をもたらしていると推測される。「まちづくり」領域では、「祭り・イベント」（83.9%）と希望が突出しており、「地域おこし」（18.3%）、「災害」（14.4%）、「子育て支援」（11.3%）、「町並み保全」（5.9%）であった。「社会福祉」領域では、「障がい児・者支援」（48.5%）、「高齢者支援」（46.0%）、「病院ボランティア」（42.5%）の関心が高く、「路上生活者支援」（15.0%）、「自助グループ支援」（11.0%）という結果であった。「心理」領域では、「不登校児童・生徒の支援」（72.2%）、「メンタルフレンド」（53.5%）であった。「ボランティア活動支援」領域では、「企画・広報」（49.9%）の人气が高く、ついで「事務補助」（27.4%）、「人材育成」（21.3%）、「ボランティアコーディネート」（14.9%）、「資金調達」（12.2%）、「ホームページ管理」（12.2%）、「政策提言」（11.1%）であった。こういった領域ごとの細部の活動希望分野についても、この数年の傾向には、ほとんど変化がみられなかった。

（4）ボランティア活動を始めるにあたっての心配事

「ボランティア活動を始めようとするとき、主に心配なことは何ですか」（複数回答）では、「自分ができるか」（44.2%）が最も高く、次いで「相手とうまく接することができるか」（32.4%）、「最後まで続けられるか」（31.4%）、「役に立てるか」（28.9%）、「自分の時間がなくなってしまうかわないか」（27.0%）の順で比較的高い割合を示していた（図12）。この順位や割合も、ほぼ例年と同様であった。

（5）ボランティアセンターの認知度

最後に「明治学院大学にはボランティアセンターがあることを知っていましたか」に関しては、「はい」と回答したのは52.8%、「いいえ」が40.9%、「未回答」が6.4%であった（図13）。「はい」という回答をした新入生の割合の変化をみると、2005年度41.6%、2006年度42.3%、2007年度68.0%、2008

年度 47.4%、2009 年度 49.1%となっており、2007 年度に突出して認知度が高かったが、この3 年間はほぼ半数程度の新生が認知しているという割合で落ち着いてきている。2011 年度の新生については、2011 年度より新たに取り組むこととなった「One Day for Others」についての情報提供を入学前に行っているため、認知度がさらに高くなることが期待される。

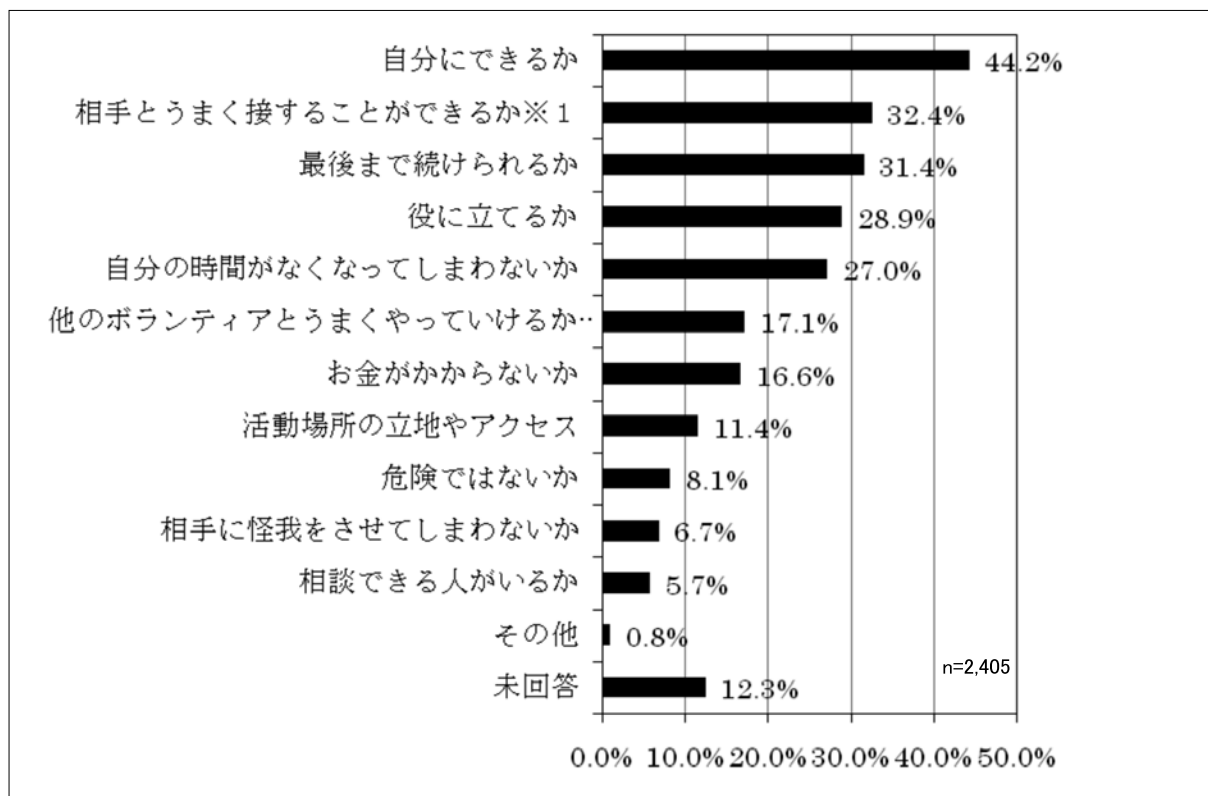


図 12 ボランティア活動を始めに当たっての心配事

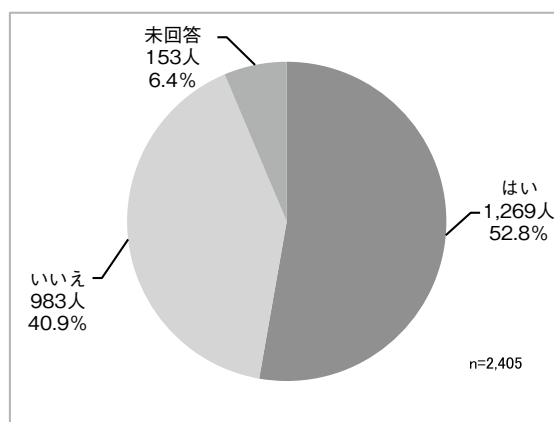


図 13 ボランティアセンターの認知度

3. ボランティア活動へ参加したい理由および参加したくない理由についての要因分析

ここまで、単純集計および簡単なクロス集計を用いて、回答の分布について概観してきた。最後に、大学時代にボランティア活動に参加したい理由および参加したくない理由について、もう少し分析を深めてみたい。前述した通り、参加したい理由について調査票では、「新しい出会いや経験を得たい」から「その他」までの9項目の選択肢から当てはまるものを全て選んでもらっている。この回答パターンの背後にどのような要因が潜んでいるのかを、主成分分析という手法を用いて探ることとする。

(1) 参加したい理由について

大学時代にボランティア活動に参加したいと回答した学生1452名のみを対象として、参加したい理由9項目の背後に潜在する要因を、主成分分析を用いて析出した。また、性別との関連を検討するために、性別（男性：0、女性：1のダミー変数）も加えた。なお、分析結果を見やすくするために、因子負荷量の絶対値が0.25以上のものだけを表3に示した。

表3 参加したい理由

	第1主成分	第2主成分	第3主成分
自分のやりたいことを探したい	0.487	0.281	
新しい出会いや経験を得たい	0.696		
知識を広げたい	0.668		
授業では得られないものを学びたい	0.631		
地域や人のために役立ちたい	0.501		
ものの見方や考え方を広めたい	0.677		
自分の得意なことを活かしたい	0.387	0.566	
友人を得たい	0.487	0.522	
その他			0.953
性別	0.316	-0.588	
固有値	2.761	1.117	1.015
寄与率	27.613	11.171	10.151
累積寄与率	27.613	38.784	48.935

分析の結果、3つの主成分、すなわち3種の要因が析出された。第1の要因（第1主成分）は、「新しい出会いや経験を得たい」「知識を広げたい」「授業では得られないものを学びたい」といった項目に大きな負荷を示していたことから、＜知的好奇心＞を示していると考えられる。また性別が第1主成分に対して正の大きな負荷を示していたことから、この「知的好奇心」は女性に特徴的なものであることが示唆された。この点はクロス集計の結果と同様の結果であった。第2の要因は、「自分の得意なことを活かしたい」「友人を得たい」「自分のやりたいことを探したい」に対して大きな負荷を示していたことから、＜自己実現欲求＞を示していると考えられる。この第2の要因については、性別が負の大きな負荷を示していたことから、男性に特徴的なものであることが示された。第3の要因として析出されたのは、

「その他」という項目であった（したがって第3の要因は<その他>と命名できよう）。これは、これまでの調査で用いられてきた選択肢では測定できなかった「理由」を、固有に選択している学生が存在することを示している。したがって、学生へのヒアリングなどを通して、8項目以外の理由を探索しておく必要があることがわかる。

なお、累積寄与率は、これらの3種類の要因によって参加したい理由の48.9%が説明されることを示しており、半分弱しか説明できていないことがわかる。このことから、現在我々センタースタッフが想定している「参加希望理由」とは異なる、新入生が実際に抱えている「参加希望理由」を明らかにしておく必要があることがわかる。

(2) 参加したくない理由について

大学時代にボランティア活動に参加したいと回答しなかった学生939名のみを対象として、参加したいとは思わない理由10項目の背後に潜在する要因を、主成分分析を用いて析出した。また、性別との関連を検討するために、性別（男性：0、女性：1のダミー変数）も加えた。なお、分析結果を見やすくするために、因子負荷量の絶対値が0.25以上のものだけを表4に示した。

表4 参加したいと思わない理由

	第1主成分	第2主成分	第3主成分	第4主成分
関心がない	-0.305	0.456	0.434	
時間がない		-0.767	0.256	
情報がない	0.554	0.296		
きっかけがない	0.602		-0.348	
お金がない	0.4	-0.424	0.432	
知識や技術がない	0.588			
やりたいものがない	0.267		0.458	-0.292
人間関係がうまく作れない	0.489		0.274	0.29
これまでの体験からいやになった		0.267		0.535
その他				0.687
性別			-0.534	
固有値	1.615	1.276	1.233	1.054
寄与率	14.684	11.596	11.211	9.585
累積寄与率	14.684	26.28	37.49	47.075

分析の結果、4種類の要因が析出された。第1の要因は、「きっかけがない」「知識や技術がない」「情報がない」といった項目に大きな負荷を示していたことから、<参加の糸口の欠如>を示していると考えられる。第2の要因は、「時間がない」「お金がない」に負の大きな負荷を示し、「関心がない」「情報がない」「これまでの体験からいやになった」に正の大きな負荷を示していた。すなわち、時間やお金が

ないことが理由ではなく、情報がなく、関心がない、そして過去の嫌な体験が理由となっていた（したがって、第2の要因は＜嫌な体験に基づく関心の喪失＞と命名できよう）。前述した通り、大学入学前のボランティア経験は新入生の約半数であったことを考え合わせると、過去のボランティア経験で嫌な思いをし、ボランティア活動に対して関心を失った学生が、少なからず存在することが示唆される。この第2の要因は、寄与率が示しているとおりの、ボランティア活動に参加したいと思わない理由の11.6%を説明している。

第3の要因は、「きっかけがない」わけではないものの、「やりたいものがない」「関心がない」「お金がない」という理由であり、＜無関心＞を示している。この要因は、男子学生に特徴的なものである。無気力・無関心な男子学生が一定程度存在することが示唆される。第4の要因は、「やりたいものがない」わけではないものの、「これまでの体験からいやになった」「その他」という理由であり、＜嫌な体験＞を示している。第2の要因が、嫌な体験が関心の喪失に結びついているのに対して、この第4の要因は関心の喪失には結びついておらず、「やりたいもの」も失っていない。この第4の要因を理由に挙げている新入生たちに対しては、過去の嫌な体験とはどのようなものであり、それを繰り返さないための環境整備ができれば（それができていることが、この学生たちにわかれば）、ボランティア活動に参加してもらえる可能性があるといえよう。

(3) 考察

これらの要因分析の結果をまとめると、次のようになる。参加したい理由としては、①知的好奇心、②自己実現欲求、③その他、が挙げられており、②自己実現欲求については男子学生に特徴的であった。一方、参加したいと思わない理由としては、①参加の糸口の欠如、②嫌な体験に基づく関心の喪失、③無関心、④嫌な体験、が挙げられており、③無関心については男子学生に特徴的であった。

参加したい理由、参加したいと思わない理由のいずれについても、これまで数年の調査で用いられてきた選択肢では十分に測定できていないため、学生へのヒアリングなどを通して、現在まで我々が想定してこなかった学生固有の「理由」を明らかにしておく必要があることが示唆された。また、回答の頻度としては少ないがためにこれまで見過ごされてきた（「時間がない」「関心がない」「きっかけがない」といった大きな声に、その訴えがかき消されてきた）、大学に入学する前に行ったボランティア活動における嫌な体験が直接的に、またボランティア活動に対する関心の喪失を媒介として間接的に、「ボランティア活動をしたくないと思わない理由」につながっている可能性が示唆された。したがって、ボランティアセンターとしては、今後、嫌な体験を繰り返さないための環境整備に努める必要があるといえよう。学生の「ボランティア活動」を活発にするためにはさまざまな方策が考えられるが、「ボランティア活動」という用語に付随したネガティブなイメージを払拭する試みもまた必要であることを指摘しておきたい。

(浅川)